



真山が走り去ってからしばらくして、加夏子は浜から身体を起こした。

銃声が出て押し倒されて、砂に顔を埋め息を潜めているうちにアドレナリンは潮が引くように冷め、自分を見つめる余裕が生まれた。

暗い沖へ目をやる。

傾いた船。少し離れた所にもう一艘の影。

他には何も見えない。真山も、追ってきた連中の姿も。

浜風と潮騒の音だけが辺りを埋め尽くしていた。

ふらりと立ってみた。

立って初めて、自分が立っている事に気がついた。

「たってる…うそ…」

足を踏みだそうとして派手に転んだ。

まるでよちよち歩きの赤ん坊のように、足は思い通りに動いてくれなかった。

加夏子の受けた傷は脊椎の神経束を圧迫し運動機能に障害を与えていたが、骨片は手術で除去されていた。元々足自体には何の損傷も無かったのだが、彼女が受けた心の傷が、足に動くことを忘れさせていたのだ。

加夏子の主治医である九十九医師はかつて、リハビリトレーナーの久我に『まだ終わっていない』と告げた事があったが、それはこの事を指していたのだ。

だが今、彼女を呪縛していた心の枷は吹き飛んだ。

親しい者達の命の危急が、忘れかけていた本能を呼び覚ましたのだ。

それは覚醒の歓喜と共に叫んでいた。

たて

あるけ

はしれ

吠えろ

そして救え

と。

加夏子はもういちど立ち上がった。

一歩

二歩

三歩

引きずるように足を踏み出す。

助けたいひとのために。

たすけなければならない人達のために。

そして自分の…

波打ち際が少しづつ近付いてきた。

向こうから何かがやってくる。

ザブザブと音を立てて。

追っ手かもしれないなどと加夏子は考えなかった。

ただただ憑かれたように海へと歩き続ける。

前へ。ただ、前へ。

音が形を成してきた。

ひと…誰かを背負った人影。

真山だった。北山をおぶっていた。

「真山さんっ！」

「…しんじまった…北さんが…死んじまったよお…」

まるで幼な児のように泣きじゃくりながら真山は浜へとあがってきた。

「ちがうっ！ ちがうよ、まだ生きてる！ よく見てっ！！」

棒のように立ち尽くす真山に、必死の形相の加夏子がしがみついた。

「いきてるよっ！！」

◇

翌日の午後。

痩せぎすの男が、潮の香りのきつい風を巻くように病院前の坂を登っていた。

幾度かハンカチで額を押さえると、丸眼鏡の奥から茫々としたまなざしを白い建物へと向けた。

やれやれ、やっと着いたか…

だるそうに呟いた男は、よろよろと病院の入り口へ向け歩きだした。

◇

同じ日。

尾道市民病院。3 X X号室。

ドアを空けて顔を出したのは真山と柴田刑事だった。

「意識が戻らなきゃ事情聴取って訳にはいかねえか」

「開放性骨折で出血多量、縛った足は敗血症になりかかっていた。他にも大小の骨折と全身打撲…よく生きてたものです」

どこか呆れた口調で、真山は隣りを歩く柴田に言葉を返した。

「まあなんだ、あんなゴキブリおやじでも生きててもらわにゃ役に立たねえからな。何にせよ、まずはメデタシってとこか」

「フフ…」

「なんでい、気持ち悪い笑い声だしやがって」

ギョ口目を剥いて柴田が真山を睨みつけた。

「柴田さん、何だかんだ言っても北さんの事、心配だったんじゃないですか」

「あん？」

「ICUの前で渋い顔してウロウロしてましたよね」

「フン、俺も聞いたぜ、あのお嬢ちゃんからよ。お前ガキみたいにオィオィ泣きながら野郎おぶってきたんだってな」

「それは…その…」

カウンターを喰らった真山が口籠もる。

「野郎の寝言、聞いたか」

「？」

「女房と子供の名前だ。あれは」

廊下の角まで来ても柴田は曲がらず、正面の明かり取りの窓に背を向け寄りかかった。

「俺がまだペーペーだった頃の話だ。酷い事故だったよ。首都高での多重衝突。渋滞のケツに大型トレーラーが突っ込んで10台が炎上。被害者は誰も助からなかった。アイツの女房と娘も、な」

天井を見上げた柴田は、誰にともなく呟いた。

「野郎、何度も何度も警察に来て『犯人を出せ、ブチ殺してやるっ!』って吠えてたよ。手がつけれなくて留置所に放り込んだら、奴、鉄格子ひん曲げやがった。怖かったぜ、あん時はよ」

ひきつった顔を真山に向けた。

少しして、笑っているのだと真山は気がついた。

「青かったんだな俺も。あのオッサンとはその頃からの腐れ縁さ」

その時、二人に男が歩み寄ってきた。

「どうやらケリはついたようですね、先輩」

「おまえ…」

真山が目を見開いた。

九十九医師は穏やかな笑顔を浮かべながら真山と柴田に歩み寄り、軽く会釈をした。

「来てたのか」

「先輩を信用してなかった訳じゃないですからね」

「クライアントは大事にするさ」

真山も軽く微笑みながら、窓に寄りかかっている柴田を紹介した。

「病院で一度、お見かけしましたよ」

「あんた、医者か？」

「清水加夏子の主治医です」

「ほう、あのお嬢ちゃんのね」

値踏みするように、柴田は九十九の爪先から脳天辺まで視線で嘗め回した。

九十九は砕けた口調などおくびにも出さず、淡々と語り出した。

「幾つか病室を回ってきましたよ。堀川君の怪我はそれなりに酷いですが、ちゃんと直るものばかりです。移動出来るようになったら東京で静養させますよ、もっとも彼の場合は他に問題があるのですが…」

微かに眉をしかめた真山の脇からギョロ目を剥いた柴田が口を出そうとしたが、九十九は無視して言葉を続けた。

「あの大きな子、清水加夏子はヨシオと呼んでいましたが、大量の血液を失った筈なのにピンシャンしています。輸血は膨大でしたがね。北山さんもタフですが、彼の場合は異常です。ある種の『先祖返り』みたいなものかも知れません。今は麻酔で眠っていますが、あの巨体で14歳とは…」

少し呆れたように頭を一つ掻いた。

「佐野碧は極度に衰弱していて、予断を許さない状態です。何とか持ちこたえて欲しいですが、乃木秀司は今の所、手の付けようがありません。彼の家族の了解が得られれば東京へ転院させようかと考えています」

「彼を、東京へ？」

ちょっと驚いて、真山は九十九を見た。

「ええ。経緯はどうあれ、彼はアルツハイマー患者が辿る病状の逆へと向かってる。今は見当も付きませんが、何らかの治療方法を確立出来るかも知れません」

「あの女が聞いたら泣いて喜びそうだな。奴はどうした？ 怪我が酷くてまだ取り調べも出来ないそうじゃないか」

柴田が皮肉な調子で口を挟んだ。

「…衣笠君、ですか…」

九十九が眉をしかめ、ゆっくりとロイド眼鏡を外す。

畳んだ眼鏡を縦に握り反対側の肩口をスツとなぞった。

「看護師は続けられないでしょうね」

